

教員のジェンダー観と児童生徒との関わり

春日 由美*・土屋菜美子**・長谷 和久*

Teachers' Views of Gender and Teachers' Relationships with their Students at School

KASUGA Yumi*, TSUCHIYA Namiko**, NAGAYA Kazuhisa*

(Received September 29, 2023)

本研究の目的は、教員のジェンダー観や校種、および性別により、児童生徒への意識や関わりに違いがあるかについて、児童生徒側の性別も合わせて検討することである。対象は小中学校の教員123名（小学校男性27名、小学校女性53名、中学校男性24名、中学校女性19名）で、2022年12月に質問紙調査を実施した。質問紙の構成は、「役割分業観」と、男女の児童生徒それぞれに対する「生徒への抵抗感」「指導上の困難感」であった。分析の結果、小学校男性教員は女子児童への関わりは難しいという意識が高い可能性があること、小学校女性教員は男女区別なく接している意識が高いことが考えられた。また、中学校教員は男性教員・女性教員いずれも同性の生徒に関わりやすさや理解しやすさを感じている可能性が示唆された。

問題と目的

今日においても、日本では収入や社会的地位を含めて著しい男女格差があり、このような性別による不平等や格差をジェンダー・ギャップという（黒田, 2022）。高橋（2009）は、子どもは親や教員から性別によって異なった役割や行動を期待されており、こうした周囲からの期待は子どもの性格形成や自己概念に影響する可能性を指摘しているが、松村（2009a）は「現代社会にあっては、少なくとも性別によって、男だから、女だからという理由で、個人の能力の伸ばし方を限定するようなことがあってはならない」とし、一人ひとりの多様な力をできる限り伸ばすためには、教育の力が大きいと述べている。このように、学校における無意識のジェンダー・バイアス（アンコンシャス・バイアス）や、個々の教員のジェンダーに関する意識や行動は、児童生徒のジェンダー観形成において、重要な役割を果たすと考えられる。

ところで、これまで教員のジェンダーに関する研究として、学年配置や教科など、教員を取り巻く環境に関するジェンダー・バイアスや格差が報告されている。玉城ら（2013）は、小学校低学年担任には男性より女性が多くを占めるという学年配置の不均衡が存在すると指摘し、松川（2015）も小学校教員についての分析から、女性は男性より有意に1年生担任の回数が多いことを報告している。また玉城ら（2013）は、小学校男性教員における

低学年担当の経験について検討し、低学年に配置される際には、男性的な役割、つまり荒れた学級の立て直しを期待されることが多いことを明らかにしている。このように、教員を取り巻く環境において、性別により適正や資質が異なると考えるジェンダー観が根強いことが推察される。

一方で、高島（2014）は、小学校と中学校の教員を対象に調査を行い、小学校では担任する学年に、中学校では担当する教科にジェンダー・バイアスの実態があることを報告しているが、同時に教員たちは自分の職場を「ジェンダー・バイアスのない職場」と評価していることも明らかにしている。また飯島（2019）は、教員という職業は男女平等に就労継続ができる場と考えられる傾向にあり、ジェンダーによる格差が見えにくくなっていることを指摘している。このように、教員は自らを取り巻く環境での性別の偏りに気づきにくいことが考えられる。

一方で、木村（2010）は子どもたちがジェンダーに敏感な視点をもつようになるために、その前提として教員がそうした視点を持つことが重要であると指摘している。また、眞鍋・木村（2008）は「学校内では、ジェンダーの再生産と変容が、学校・教師・生徒のダイナミックな関係の中で生起されていると考えられる」と述べている。これらから、学校におけるジェンダー・バイアスや、教

* 山口大学教育学部, 〒753-8513 山口市吉田1677-1, kasuga@yamaguchi-u.ac.jp ** 山口大学教育学部卒業生

員が抱くジェンダー観は、児童生徒のジェンダー観を含む人格形成に影響する可能性が考えられる。

そして、教員自身のジェンダー観やジェンダー・ギャップに関する研究もなされている。飯島（2019）は小学校と中学校の教員を対象に調査を行い、子どもが未就学から小学校の時期に、女性教員の79.4%が家事育児の半分以上を担うのに対し、男性教員は3.5%であったこと、また約半数の教員が家庭生活の役割は女性が向いていると思われ、2割を超える教員が管理職の適正や理数系の能力は男性や男子の方が高いと思っていることを報告している。鳥毛・鄭（2020）は中学校教員を対象に調査を行い、女性教員の方が男女平等意識が高く、自立や家庭と仕事の両立に関して特に男女平等を意識すること、昇進については男性教員の方が意識が高いことを報告している。そして苦米地（2009）は小学校と中学校の教員を対象にジェンダー観（「能力や適性は男女で異なる」「女らしさ、男らしさを否定すべきではない」など）について調査を行い、小学校では男性教員と女性教員の間に男女特性に関する意識に大きな差は見られず、中学校では女性教員の方が男性教員より男女特性に否定的であったことを指摘している。このように、教員において、適正や能力についてのジェンダー・ギャップやジェンダー・バイアスは依然として大きく、一方で、校種や男女の違いにより、ジェンダー観は異なることが考えられる。

このように教員におけるジェンダー・バイアスが大きい背景の一つとして、教員自身がジェンダーについて学ぶ機会の乏しさが考えられる。例えば、木村（2010）はジェンダーに敏感な視点からの学習や教育をめぐる現在の教員研修の現状を調査し、ほとんどの都道府県が「男女平等に関する教育」への取り組みの重点課題として「教員研修の充実」を明記しているが、若手教員が「男女平等・男女共同参画」に関わる事柄を学ぶ場や機会が十分にあるとは言いがたいことを指摘している。また、鳥毛・鄭（2020）も中学校教員において、ジェンダーや男女平等に関する研修・講習会等の機会がなかったとする教員が55.7%いたことを報告し、木村（2020）も教員対象の調査から、ジェンダーや多様な性に関する研修参加の経験がない教員が、全体の4分の3に及ぶことを明らかにしている。これらから、現状では教員自身がジェンダーについて学ぶ機会は少ないと考えられ、教員が児童生徒に接する際に意識するジェンダー観は教員に共通するものではなく、個々の教員の経験や価値観により異なることが考えられる。

そして、教員のもつジェンダー観と児童生徒への関わりに関する研究も行われてきた。先述の苦米地（2009）の調査では、性別役割を肯定する教員ほど、ジェンダー

教育や性教育を重視しないことが明らかにされている。また矢野（2019）は、小学校教員のジェンダー観について検討し、性別特性論の信念が強い教員ほど、教科学習能力の性差を大きく認識し、性別によって働きかけが異なることを明らかにしている。このように、教員のジェンダー観により、児童生徒への働きかけが異なることが考えられる。

また、教員の性差と児童生徒の性差の組み合わせによる関わり方の違いも検討されている。中澤（2009）の調査では、「男の子だから、女の子だからと言わないようにしている」割合が、小学校男性教員・小学校女性教員と中学校女性教員では7割以上だったが、中学校男性教員では56.8%であったことが報告されている。寺町（2020）は、小学校教員において、児童関関係に対する教員の認識や介入にジェンダー・バイアスが歴然と存在し、女子たちは「関係性を重視する」という認識が、教員の介入を方向づけていたことを明らかにしている。そして先述の鳥毛・鄭（2020）は、中学校教員を対象とした調査結果から、男性の方が女性よりも「力仕事は男子、整理整頓は女子」のような、男女での性別役割分業に沿った指導をしていると述べている。加えて、女性教員の方が生徒の呼び方や生徒指導にジェンダー・フリーを意識していることを報告しているが、一方で、それらの質問項目の得点自体が低かったことから（「そう思わない」から「そう思う」の1～4点中2.51～2.94点）、学校文化として、生徒の「さん」「くん」の呼び方が習慣化されていることや、生徒指導の男性教員・女性教員の役割が固定化されている可能性も指摘している（鳥毛・鄭, 2020）。

以上のように、学校文化や個々の教員においても、ジェンダー・ギャップやジェンダー・バイアスが存在しており、それが児童生徒に対する意識や関わりに影響する可能性が考えられる。また、先行研究から、校種や教員の性別と、児童生徒の性別の組み合わせによっても、それらが異なることが考えられる。そこで本研究では、教員のジェンダー観や校種、性別により、児童生徒に対する意識や関わりに違いがあるかについて検討を行う。その際、児童生徒側の性別にも着目する。

方法

1. 調査時期・調査方法

調査は2022年12月に行った。小学校3校、中学校2校の校長に研究主旨と方法等を文書と口頭で説明し、研究協力の承諾を得て、質問紙調査の配布と回収を行った。なお、本研究は山口大学での倫理審査の承認を受け行った（管理番号：202206401）。

2. 対象者

回答に不備のあったものと、校種を「その他」と選択

した1名を除く123名分（平均年齢43.5±12.4）の回答を分析に用いた。小学校男性教員27名、小学校女性教員53名、中学校男性教員24名、中学校女性教員19名であった。

3. 質問紙の構成

(1) 属性：性別、年齢、校種を尋ねた。

(2) ジェンダー観項目：苫米地（2009）の作成したジェンダー観を測定する「男女特性観尺度」（「能力や適性は男女で異なる」など）と「役割分業観尺度」（「子どもがちいさいうちは、母親は家にいた方がよい」など）の2下位尺度9項目を用いた。「1. 全くそう思わない」から「4. とてもそう思う」の4件法で尋ねた。本研究では合計得点を項目数で除した平均点を用いた。

(3) 児童生徒との人間関係における悩み（男子児童生徒対象・女子児童生徒対象）：都丸・庄司（2005）の「生徒との人間関係における悩み」尺度の4下位尺度のうち、「生徒への抵抗感」（「気持ちや行動を理解できない生徒がいる」など）と「指導上の困難感」（「生徒への関わりに自身が持てない」など）の2下位尺度を用いた。なお、都丸・庄司（2005）で因子負荷量が.40未満であった項目を除き、計15項目を調査に用いた。また、「生徒」を「児童（生徒）」とするなどの修正を行い、男子児童生徒と女子児童生徒それぞれに対する悩みを尋ねるため、男子児童生徒に関する質問項目（以下、「抵抗感男子」「指導困難感男子」）と女子児童生徒に関する質問項目（以下、「抵抗感女子」「指導困難感女子」）に分けて尋ねた。回答方法は「1. あてはまらない」から「4. あてはまる」の4件法とした。本研究では合計得点を項目数で除した平均点を用いた。

(4) 教師の生徒に対する態度の自己認識：中澤（2009）の作成した性別によって生徒に異なる接し方をしているかを測定する7項目（「授業で指名することが多いのは」など）。「女子のほう」「どちらかといえば女子」「男女同じくらい」「どちらかといえば男子」「男子のほう」の5件法で尋ねた。分析においては、「女子のほう」「どちらかといえば女子」を合わせて「女子」、「どちらかといえば男子」「男子のほう」を合わせて「男子」を選択したもののみとした。

結果

1. 尺度の信頼性

(1) ジェンダー観項目： α 係数は「男女特性観因子」が.51、「役割分業観因子」が.63であり、「男女特性観因子」は α 係数が低いため、「役割分業観因子」（4項目。以下、「役割分業観」）のみ分析に用いた。

(2) 児童生徒との人間関係における悩み： α 係数は「抵抗感男子」が.80、「指導困難感男子」が.94、抵抗感女子」が.89、「指導困難感女子」が.95であった。

2. 各下位尺度間の相関

(1) 全体の相関

各下位尺度の平均値と、下位尺度間の相関係数を表1に示す。「役割分業観」「抵抗感男子」「指導困難感男子」「抵抗感女子」「指導困難感女子」の全てにおいて、下位尺度間で統計的に有意な正の相関がみられた。

(2) 校種・男女別の相関

小学校男性教員・小学校女性教員・中学校男性教員・中学校女性教員の4群それぞれにおける下位尺度間の相関を表2～表5に示す。その結果、小学校男性教員では、「役割分業観」と「抵抗感女子」の間と、「抵抗感男子」「抵抗感女子」「指導困難感男子」「指導困難感女子」それぞれの間で統計的に有意な正の相関がみられた。小学校女性教員と中学校男性教員では、「抵抗感男子」「抵抗感女子」「指導困難感男子」「指導困難感女子」それぞれの間で統計的に有意な正の相関がみられた。中学校女性教員では、「指導困難感男子」と「抵抗感男子」「抵抗感女子」「指導困難感女子」の間に、また「指導困難感女子」と「抵抗感男子」「抵抗感女子」の間に統計的に有意な正の相関がみられた。

3. 下位尺度の平均値と校種・男女別での平均値の差

校種・男女別ごとの下位尺度の平均値を表6に示す。小学校男性教員・小学校女性教員・中学校男性教員・中学校女性教員の4群間の各下位尺度の得点について1元配置分散分析で比較した。その結果、「抵抗感女子」において、群間に有意でかつ効果量も中程度の差が見られた ($F(3,119) = 3.16, p < .05, \eta_p^2 = .07$)。Tukey法を用いて多重比較を行ったところ、小学校男性教員の得点が小

表1. 各尺度の平均値と尺度間の相関

	平均値 (SD)	抵抗感男子	指導困難感男子	抵抗感女子	指導困難感女子
役割分業観	1.89(.49)	.239**	.218*	.250**	.196*
抵抗感男子	1.60(.46)		.747**	.742**	.675**
指導困難感男子	1.55(.52)			.753**	.900**
抵抗感女子	1.66(.54)				.844**
指導困難感女子	1.59(.54)				

** $p < .01$ 、* $p < .05$

表2. 小学校男性教員の各尺度の平均値と尺度間の相関

	抵抗感男子	指導困難感男子	抵抗感女子	指導困難感女子
役割分業観	.369	.322	.427**	.298
抵抗感男子		.805**	.873**	.729**
指導困難感男子			.699**	.880**
抵抗感女子				.773**

** $p < .01$

表3. 小学校女性教員の各尺度の平均値と尺度間の相関

	抵抗感男子	指導困難感男子	抵抗感女子	指導困難感女子
役割分業観	.158	.196	.073	.164
抵抗感男子		.795**	.834**	.730**
指導困難感男子			.882**	.920**
抵抗感女子				.903**

** $p < .01$

表4. 中学校男性教員の各尺度の平均値と尺度間の相関

	抵抗感男子	指導困難感男子	抵抗感女子	指導困難感女子
役割分業観	.380	.289	.385	.268
抵抗感男子		.723**	.662**	.541**
指導困難感男子			.799**	.891**
抵抗感女子				.894**

** $p < .01$, * $p < .05$

表5. 中学校女性教員の各尺度の平均値と尺度間の相関

	抵抗感男子	指導困難感男子	抵抗感女子	指導困難感女子
役割分業観	.034	-.078	.049	-.158
抵抗感男子		.650**	.442	.586**
指導困難感男子			.512*	.916**
抵抗感女子				.707**

** $p < .01$, * $p < .05$

学校女性教員の得点より有意に高く、効果量も中程度であった ($p = .004$, $d = 0.49$)。

4. 校種・男女別での児童生徒に対する態度の自己認識

小学校男性教員・小学校女性教員・中学校男性教員・中学校女性教員の4群における「教師の生徒に対する態度の自己認識」7項目の「男子」「男女同じくらい」「女子」の選択率についてFisherの正確確率検定を実施し、モンテカルロ法に基づいて p 値を算出した。なお、 p 値を近似的に計算するために10,000回のランダムなシミュレーションを実施した(表7)。その結果、項目「授業で指名することが多いのは」($p = .040$)、項目「つい優しくしてしまうのは」($p = .015$)、項目「励ますことが多いのは」($p = .042$)、項目「考えていることや気持ちが分かりやすいのは」($p < .000$)、項目「仕事を頼みやすいのは」($p = .022$)において、有意な偏りがみられた。

残差分析の結果、項目「授業で指名することが多いのは」では小学校女性教員が「男女同じくらい」を選ぶ割合が多く($p = .021$)、中学校男性教員は「男子」を

選ぶ割合が多かった($p = .041$)。項目「つい優しくしてしまうのは」では小学校女性教員は「男女同じくらい」を選ぶ割合が多く($p = .003$)、「女子」を選ぶ割合が少なかった($p = .002$)。項目「励ますことが多いのは」では、小学校男性教員では「男子」を選ぶ割合が多く($p = .007$)、「男女同じくらい」を選ぶ割合は少なかった($p = .039$)。また、項目「考えていることや気持ちが分かりやすいのは」では、小学校男性教員では「男子」を選ぶ割合が多く($p = .021$)、「女子」を選ぶ割合が少なかった($p = .006$)。また、小学校女性教員では「男子」が少なく($p < .000$)、「男女同じくらい」を選ぶ割合が多かった($p = .009$)。中学校男性教員では「男子」を選ぶ割合が多く($p < .000$)、「女子」を選ぶ割合が少なく($p = .011$)、中学校女性教員では「女子」を選ぶ割合が多かった($p < .000$)。そして項目「仕事を頼みやすいのは」においては、小学校女性教員では「男子」を選ぶ割合が少なく($p = .033$)、中学校男性教員では「男子」を選ぶ割合が多かった($p = .010$)。

表6. 校種別・男女別の各尺度の平均値 (SD)

	小学校男性教員	小学校女性教員	中学校男性教員	中学校女性教員
役割分業観	1.94(.59)	1.81(.45)	1.97(.49)	1.93(.45)
抵抗感男子	1.75(.46)	1.57(.48)	1.62(.45)	1.46(.39)
指導困難感男子	1.56(.53)	1.49(.54)	1.64(.47)	1.59(.52)
抵抗感女子	1.86(.50)	1.51(.50)	1.78(.59)	1.65(.58)
指導困難感女子	1.69(.53)	1.50(.56)	1.70(.56)	1.57(.54)

表7. 校種・男女4群での教師の児童生徒に対する態度の自己認識のクロス集計表

教師の生徒に 対する態度の 自己認識	群 (n)	男子		男女同じくらい		女子		p値 (Fisherの 正確検定)
		人数	p値	人数	p値	人数	p値	
授業で指名する ことが多いのは	小学校男性教員 (27)	2	.642	24	.960	1	.334	.040*
	小学校女性教員 (53)	2	.052	51 △	.021	0	.215	
	中学校男性教員 (24)	5 △	.041	19	.104	0	.483	
	中学校女性教員 (19)	3	.335	15	.149	1	.173	
つい厳しく 叱ってしまうのは	小学校男性教員 (27)	16	.034	11	.043	0	.594	.070
	小学校女性教員 (53)	16	.027	36	.046	1	.249	
	中学校男性教員 (24)	13	.159	11	.189	0	.621	
つい優しく してしまうのは	小学校男性教員 (27)	0	.450	19	.473	8	.336	.015*
	小学校女性教員 (53)	1	.842	47 △	.003	5 ▼	.002	
	中学校男性教員 (24)	0	.483	16	.255	8	.169	
休み時間などに 話しかけること が多いのは	小学校男性教員 (27)	1	.881	25	.984	1	.914	.052
	小学校女性教員 (53)	0	.077	52	.044	1	.287	
	中学校男性教員 (24)	3	.004	20	.050	1	.978	
励ますことが 多いのは	小学校男性教員 (27)	4 △	.007	20 ▼	.039	3	.655	.042*
	小学校女性教員 (53)	2	.621	49	.079	2	.080	
	中学校男性教員 (24)	0	.216	22	.385	2	.907	
	中学校女性教員 (19)	0	.283	15	.321	4 △	.044	
考えていること や気持ちが 分かりやすいのは	小学校男性教員 (27)	14 △	.021	13	.941	0 ▼	.006	.000**
	小学校女性教員 (53)	7 ▼	.000	33 △	.009	13	.094	
	中学校男性教員 (24)	16 △	.000	8	.092	0 ▼	.011	
	中学校女性教員 (19)	4	.217	6	.103	9 △	.000	
仕事を 頼みやすいのは	小学校男性教員 (27)	2	.545	21	.688	4	.226	.022*
	小学校女性教員 (53)	2 ▼	.033	44	.538	7	.149	
	中学校男性教員 (24)	6 △	.010	18	.450	0	.087	
	中学校女性教員 (19)	3	.421	16	.656	0	.137	

注) △は有意に多い、▼は有意に少ないことを示す。

**p<.01、*p<.05

考察

本研究では、小学校教員と中学校教員を対象に、教員のジェンダー観や校種、性別により、児童生徒に対する意識や関わりに違いがあるかについて、児童生徒側の性別も含めて検討を行った。以下に、分析ごとに考察を行う。

1. 下位尺度間の関連

対象者全員についての下位尺度間の相関の結果から、各下位尺度間が関連すると考えられたが、「役割分業観」と他の下位尺度の相関係数は弱い正の相関であり (.196～.250)、今回の結果からは、ジェンダー観と児童生徒との人間関係における悩みは強くは関連しないことが示唆された。一方、児童生徒との人間関係における悩みについての尺度は下位尺度間で高い正の相関係数が確認

された(675~900)。このことから、男子に悩みを抱える教員は女子にも悩みを抱えるというように、児童生徒との関わりに悩みを抱える教員は、児童生徒の男女の区別なく悩みを抱えることが示唆されたと考えられる。特に、「指導困難感男子」と「指導困難感女子」の相関係数が.900と高く、指導困難感を抱く教員は、対象が男子であれ、女子であれ、困難感を抱く可能性が考えられる。春日(2017)は、教員対象のカウンセリングの資質向上を目的とした継続研修終了後に、参加者が「生徒とのかかわりのなかで感情がみだされることがなくなった」「気持ち楽に持てるようになった」など、カウンセリングの資質を身につけることにより、教員が子どもとの関係で困難感を抱きにくくなったことを報告している。そのため、児童生徒との関わりにおける指導困難感は、対象の児童生徒の性別以上に、教員自身の要因による可能性が考えられる。

そして、小学校男性教員と中学校女性教員では、対象者全体とは一部異なる結果が得られた。小学校男性教員の特徴として、「役割分業観」と「抵抗感女子」の間に中程度の相関係数が確認された(.427)。つまり小学校男性教員では、女性はこうあるべきと思うほど、女子児童に対して関わりにくさを感じる可能性が考えられる。女子の第2次性徴発来時期は、乳房発達が10歳前後、初経が12歳前後であり、小学校高学年にあたる。また思春期には成長速度が急激に増加する成長のスパイクがあり、女子は男子より早い11歳前後がピークとなる(日本産婦人科医会, 2021)。このような急激な外見上の変化が起こっている途中の児童期において、男性教員の性役割観が強い場合、「女子」である児童へのあるべき指導と、目の前の一人の児童への指導との間で葛藤が生じ、関わりの難しさを感じる可能性が考えられる。一方で、中学校男性教員では、「性役割分業観」と「抵抗感女子」では相関係数は有意でなかったことから、小学生よりも外見において男女差が分かりやすい中学生では、個々の生徒に対して「このように対応した方がよい」という考えと、「女性はこうあるべき」という考えの間に葛藤が生じにくいことも考えられる。

また今回、中学校女性教員の特徴として、「抵抗感男子」と「抵抗感女子」の間に有意な相関係数が確認されなかったことが挙げられる。これは他の小学校男性教員・女性教員や中学校男性教員とは異なる結果であり、先に論じたように、「抵抗感男子」と「抵抗感女子」に正の相関がある場合は、悩みを抱える教員は児童生徒の男女の区別なく悩みを抱えることが考えられるが、中学校女性教員は生徒への抵抗感を感じる場合、男女の区別なく抵抗感を感じるのではない可能性が考えられる。中学校女性教員では、「役割分業観」と「抵抗感男子」「抵

抗感女子」との相関係数は有意でなく、(.034~.049)、また中学校では女性教員は男性教員より男女平等意識が高いことが報告されている(苦米地, 2009; 鳥毛・鄭, 2020)。一方で、統計的に有意ではないが、中澤(2009)の調査では、男子生徒に対して「反抗的」と感じる割合が、中学校では女性教員は21.1%、男性教員は15.2%であり、女性教員が男性教員以上に男子生徒への抵抗感を抱く場合も考えられる。これらから、中学生女性教員は男女平等意識が高いが、実際に男子生徒と関わる中では自分と異なる性の男子生徒に対し、どのように接してよいか戸惑い、抵抗感を感じる場合などがある可能性も考えられる。

ただし、これらの考察は相関関係に基づくものであるため、本研究で示唆された因果関係については、慎重に解釈を行い、後続の研究で更なる検討を行う必要がある。

2. 校種・男女別による性役割分業観や児童生徒との人間関係の悩みの差

校種・男女別で下位尺度の平均値の差を検討した結果、「抵抗感女子」において、小学校男性教員が小学校女性教員より、得点が有意に高かった。つまり、小学校男性教員は、同じ児童を対象にしている小学校女性教員よりも、女子児童に対して関わりにくさを感じると言える。寺町(2019)は教職に就く前の大学生を対象にインタビュー調査を行っており、学生は小学校での教育実習において、「高学年の女子は気をつけた方がいいよ」「高学年の女子はそういうもの」と実習先の教員に言われたことがあると報告している。このように小学校教員における、高学年女子へのアンコンシャス・バイアスがあることがうかがわれ、また先述のように、小学校では特に女子児童での急激な身体変化が起こるため、女子児童に対して異性である小学校男性教員は、同性である小学校女性教員よりも、関わりの難しさを感じる可能性が考えられる。

3. 校種・男女別での児童生徒に対する態度の自己認識

「教師の生徒に対する態度の自己認識」について、校種・男女ごとの「男子」「男女同じくらい」「女子」の選択率を検討した。

その結果、小学校男性教員では項目「励ますことが多いのは」は「男子」が多く、「男女同じくらい」が少なかった。また、項目「考えていることや気持ちが分かりやすいのは」では「男子」が多く、「女子」が少なかった。このことから、小学校男性教員は、男子との関わりが多く、気持ちが分かりやすいと感じていることがうかがえる。一方、小学校女性教員では、項目「授業で指名することが多いのは」では「男女同じくらい」が多く、項目「つい優しくしてしまう」では「男女同じくらい」が多

く、「女子」が少なかった。項目「考えていることや気持ちが変わりやすいのは」では「男子」が少なく、「男女同じくらい」が多かった。また、項目「仕事を頼みやすいのは」では「男子」が少なかった。つまり、小学校女性教員は、男子や女子といった性別によって自分自身の態度が変わっていると認識する教員は少なく、一方で普段男女の区別なく関わっていると認識している教員が多いと考えられる。松村（2009b）は、「小学校の学校文化は男女を同一に扱う平等主義の原則の力が比較的強い」としているが、本研究では男性教員では児童の性別による違いがうかがわれ、一方女性教員は男女を同一に扱う傾向が見られた。

また、中学校男性教員では項目「授業で指名することが多いのは」では「男子」が多かった。項目「考えていることや気持ちが変わりやすいのは」では「男子」が多く、「女子」が少なかった。また、項目「仕事を頼みやすいのは」では「男子」が多かった。そして中学校女性教員では項目「励ますことが多いのは」と項目「考えていることや気持ちが変わりやすいのは」で「女子」が多かった。先行研究からは、中学校教員では、女性の方が男性よりジェンダー・フリーの意識が高いことが示されていた（鳥毛・鄭，2020；中澤，2009）。しかし今回の結果からは、中学校教員では男性も女性も、自分自身と同性の生徒のことを分かりやすいと感じたり、関わりやすいと感じることが推察された。

まとめ

今回の調査結果から、教員全体ではジェンダー観は児童生徒と関わる際の困難感に大きくは関連していないことが示唆された。一方で、小学校男性教員においては、ジェンダー観と女子児童への抵抗感が関連し、小学校女性教員よりも女子児童への抵抗感が強く見られたことから、小学校男性教員は異性である女子児童への関わりを難しいと感じる可能性が考えられた。その一方で小学校女性教員は男女区別なく接している意識が高いことがうかがえ、小学校における男性教員と女性教員のギャップがあることも考えられる。

そして中学校教員では先行研究において男性教員と女性教員の差が指摘されることが少なくなかったが、本研究ではいずれも同性の生徒に関わりやすさや理解しやすさを感じていることが示唆された。

今回の結果から、小学校男性教員は女子児童への関わりづらさを、中学校女性教員は男子生徒への関わりづらさを感じる可能性が示唆された。一方でそれらの異性の児童生徒への関わりづらさは、ジェンダー・バイアスだけでなく、異性の児童生徒への「分からなさ」も背景にある可能性も考えられた。つまり、教員が自分と異なる

性の児童生徒に対して困難を感じないためには、単に男女平等の意識の醸成だけでなく、異なる性の児童生徒の発達を正しく理解することが有益だと考えられる。

謝辞

快く調査実施に御協力いただいた校長先生、調査に御回答いただいた先生方に心より感謝いたします。

付記

引用文献において、教員、教師、教諭等の用語が用いられていたが、煩雑さを避けるため、本文では括弧書きによる直接引用や尺度名等以外は、職業を表す「教員」と表記した。

引用文献

- 飯島絵理（2019）学校教員の男女格差とジェンダー観
工学教育研究講演会講演論文集2019年度，258-259.
- 春日由美（2017）教師のカウンセリング継続研修における効果研究－自他意識・バーンアウト傾向の視点から－ 南九州大学研究報告 人文社会科学編，47B，1-8.
- 木村育恵（2010）員研修におけるジェンダーに敏感な視点からの学習・教育のあり方 北海道教育大学紀要 教育科学編，61（1），15-23.
- 木村育恵（2020）ジェンダーや多様な性に関する学校現場の現状－北海道における教員調査をもとにして－ 北海道教育大学紀要 教育科学編，71（1），1-14.
- 黒田慶子（2022）ジェンダーギャップと無意識のバイアスをどのように減らすか 森林科学，95，21-25.
- 高島裕美（2014）教員の職場における「ジェンダー・バイアス」－女性教員の職務配置のあり方に着目して－ 現代社会学研究，27，37-54.
- 高橋道子（2009）子どもの自己像の形成とジェンダー
直井道子・村松泰子（編）学校教育のなかのジェンダー 子どもと教師の調査から 日本評論社 pp.19-35.
- 玉城久美子・船山万里子・浅井幸子・望月一枝・杉山二季・黒田友紀（2013）小学校の男性教師における低学年教育の経験－性分業とその教育実践上の問題 質的心理学研究，12（1），100-118.
- 都丸けい子・庄司一子（2005）生徒との人間関係における中学校教師の悩みと変容に関する研究 教育心理学研究，53（4），467-478.
- 寺町晋哉（2019）教職を目指す学生の学校経験：友人関係、学級の経験、ジェンダー化された認識に着目して 宮崎公立大学人文学部紀要，27（1），77-102.
- 寺町晋哉（2020）女子のトラブルを「ドロドロしたもの」

- とみなす教師のジェンダー・バイアス－関係性への焦点化に着目して－ 宮崎公立大学人文学部紀要, 27 (1), 103-119.
- 苫米地伸 (2009) 教師のジェンダーについての意識 直井道子・村松泰子 (編) 学校教育のなかのジェンダー 子どもと教師の調査から 日本評論社 pp.89-103.
- 鳥毛彩花・鄭暁静 (2020) 中学校教員のジェンダーに関する意識と実態－長野県中学校教員への質問紙調査を通して－ 信州大学教育学部研究論集, 14, 197-206.
- 中澤智恵 (2009) 教師の教育実践と生徒の認識のずれ 直井道子・村松泰子 (編) 学校教育のなかのジェンダー 子どもと教師の調査から 日本評論社 pp.104-125.
- 日本産婦人科医会 (2021) 思春期とは 研修ノート No106思春期のケア
<https://www.jaog.or.jp/note/%E6%80%9D%E6%98%A5%E6%9C%9F%E3%81%A8%E3%81%AF/> (2023年9月25日取得)
- 松川誠一 (2015) 小学1年生の担任に女性教師はなりやすく男性教師はなりにくいのか 日本教育社会学会大会発表要旨集録, 67, 286-287.
- 松村泰子 (2009a) 学校教育とジェンダー1. 男女共同参画の必要性 直井道子・村松泰子 (編) 学校教育のなかのジェンダー 子どもと教師の調査から 日本評論社 pp.1-4.
- 松村泰子 (2009b) 学校教育とジェンダー3. 学校の具体的様相 直井道子・村松泰子 (編) 学校教育のなかのジェンダー 子どもと教師の調査から 日本評論社 pp.6-8.
- 眞鍋倫子・木村育恵 (2008) 学校教育とジェンダーの今: 生徒と教師の調査から 日本教育社会学会大会発表要旨集録, 60, 25-28.
- 矢野円郁 (2019) 小学校教諭におけるジェンダー意識と教科学習能力の性差に対する認識の関係－ジェンダー・ステレオタイプの再生産防止のために－ 神戸女学院大学論集, 66 (1), 73-84.